
IN BLOOM ～元英雄と普通の学生～

羽鳥 紘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IN BLOOM ～元英雄と普通の学生～

【Nコード】

N7563Y

【作者名】

羽鳥 紘

【あらすじ】

彼はごく普通の高校生だった——異世界に召喚されたという経験を持つこと以外は。異世界で英雄と呼ばれていた少女と、ただの男子高校生やへたれの、逆召喚ラブコメディ IN BLOOM ～聖少女と黒の英雄～（<http://ncode.syosetu.com/n6749q/>）の続編になりますが、未読大歓迎です。

1・現世への帰還

俺の名前は姫野咲良、あとちよつとで十七歳。異世界に飛ばされた経験がある以外は、極めて普通の男子高校生である。

と、どんなにさらつと言ってみたところで、真ん中に挟んだ言葉のせいで、説得力は極めて皆無だ。異世界に行ったことのある人間は、どんなに主張したところでどう考えても普通ではない。

けれど、それまでは俺は本当にごく平凡な高校生だった。まあ、平凡の基準も人によりけりだろうから補足するなら、性別間違われ率100%の女顔と名前は、非凡と言えばそうかもしれない。

でもその他は、成績中の下、部活馬鹿、女の子に興味はあるけど今は恋愛より遊ぶのに忙しいかなってという感じで高校一年生の終わりを過ごしてた。割と平凡だと思う。

そんな俺だけど、一応好きな人はいた。その中学校から憧れていた先輩が今年高校を卒業するわけで、俺は悪友たちにたきつけられて、卒業式の日先輩に告ることになってしまった。そして見事に振られたというオチ付まで含め、やっぱり割と普通の青春を送っていたと思う。

とにかくここまでは、大多数の人が普通ってことで納得してくれと思うんだ。問題はここからだ。

四年間の片思いが思い出に変わり、俺はその日皆が下校してしまっても、屋上で一人たそがれていた。そうしたら、突然凄い光に包まれて、気がついたら知らない場所にいたのである。ここからが、どう考えてもおかしいところ。

その知らない場所は実は地球でもなくて、「フレンシア」と「ヴアルグランド」という二つの国が数百年に渡る争いを続けている世界だった。フレンシアに落ちた俺は「聖少女」と呼ばれ、兵を率いてヴアルグランドと戦うことを要求されてしまう。だがもちろん、平和な世の中に生きるただの学生の俺にそんなことができるわけが

ない（つていうかそもそも少女じゃないし）。冗談じゃないと逃げ出した俺を助けてくれたのは、皮肉なことにヴァルグランドの英雄だった。でもこの出会いが、俺の全てを変えたんだ。

結論から言えば、俺は無事地球の日本に帰ってきた。けれど、これで普通の日々に戻ってきたかといえば、そうでもない。

異世界に飛ばされた場所と全く同じの学校の屋上に、今俺はいる。けれど、俺の目の前には、この世界にいる筈じゃない人がいる。

俺を助けてくれたヴァルグランドの英雄、エドワード。けど本当は、英雄として戦う道を選ばざるを得なかった女の子。俺が絶対にこの手で守りたいと、そう思う大事な人が。

■ □ ■

彼女の手を引いて、俺はとりあえず教室に向かって進んでいた。すっかり日は暮れてしまっているし、今日は卒業式で授業もなかったから、校舎に人の気配はない。

もしかして、もう校門が締められているかもしれないから、そして窓から出るしかない。けどその前に着替えないと、俺もエドワードも向こうの服のままだ。いくら暗いからといって、コスプレ紛いの格好で二人で歩くのは恥ずかしすぎる。教室に行けば俺のジャージがある筈だ。

実はちよつと浦島状態を懸念していたのだが、教室にはちゃんと俺の名前があった。異世界に呼ばれたのは卒業式の日だったから、もし数日でも過ぎてしまえばこの教室に俺の名前はないわけだ。だから、時間は過ぎていない筈だった。

俺は自分のロッカーからジャージを出すとそれをエドワードに渡し、自分は適当に友達のを拝借することにする。

「えつと、そのままじゃ目立つから、とりあえずそれ着てもらっていいかな」

……こんなことなら洗濯しておけばよかった。体育で使った日は

洗濯してもらってるけど、三月に入ってから授業もあんまりなくて掃除でしか着てなかったから置きっぱなしだったのである。さすがに異臭はしない……と思うけど、彼女の着替えを待ったために廊下に出ようとしたら、突然腕を掴まれてびくつとする。

「な、何？ も、もし俺の服が嫌なら、他の……」

といつても、女子のジャージを勝手に借りたら俺は窃盗犯になってしまう。それも変態のレッテル付きで。

「咲良」

どうしようと考えていると、不意に強い調子で名前を呼ばれた。

「な、なに？」

応えると、彼女は困ったようにこちらをじっと見た。そして迷うように口を開いてまた閉じ、それからようやく声を上げる。

「……着替えればいいのか？」

「え、う、うん」

だが、勿体をつけた割にはなんてことはない問いで、俺は拍子抜けして頷いた。それを見て、ふっとエドワードは俺から視線を外して腕を離す。

「わかった。少し後ろを向いていてくれ」

「え、いや、外に出てるよ」

彼女がそんなことを言うので、俺は少し慌てて扉に手をかけたが、そうするとまたエドワードが俺を掴む。

「——ここにいてくれないか」

そんな言葉に顔が熱くなる。一瞬からかわれているのかと思ったけれどそれにしてはエドワードは思い詰めたような顔をしていて、それは俺をからかう為の演技などではないように見えた。それで、顔から熱が引く。

「エドワード？」

腕を掴む手に手を重ねて、そっと呼んでみる。彼女はやはり少し迷っていたが、俺の手に視線をあてて、それからふっと息を吐いた。
「……咲良。君は、私の言葉が解っているのだな？」

たけど問いかけられた言葉が咄嗟に理解できず、俺はきょとんとして彼女を見返すしかなかった。

「え……どういう意味？」

聞き返す俺に彼女が答えたのは、ごく当たり前のことだった。なのに、全く考えもしていなかったことだったのだ。

「わからないんだ。私には君が何を言っているのか、わからない」

2・悩める家路

俺がむこうの世界で聖少女と呼ばれたのは、実際に聖少女の生まれ変わりだからだった。

もちろん、俺も始めはそんなこと信じていなかったけれど、現に頭の中で「彼女」の声が響くこと、そして俺が「彼女」と瓜二つの容姿を持つことで、否定できなくなってしまった。

そしてもうひとつ。俺が聖少女の魂を持っているからこそ、言語の違う世界で意志の疎通ができるのだと。

だとすれば、この世界となんの関わりもないであろうエドワードが日本語を理解できないのは、考えてみれば当たり前の話だ。

学校は出たものの、俺はこれからどうすればいいのか途方に暮れた。けどそうしたところで学生的身である俺には家に帰る以外の道などない。

でも、家族にエドワードのことを何て話せばいいんだろう。

そんなことを考えていると、学生カバンの中から携帯の着信音が聞こえてきた。取り出して開いてみると、画面に出てきた名前は、「姉」。

咄嗟に切りたい衝動にかられたが、そんなことをすれば余計に俺の命の保証がない。仕方なく通話ボタンを押すと、聞き慣れた、けど懐かしい、だからといって全くありがたくもない、姉の怒声が耳をつんざく。

『今何時だと思ってるのよ!?!』

そして続く音声MAXの罵詈雑言は、予想がついたので既に耳から携帯を離している。それでも充分うるさいけれど。それがひとりおり収まってから、俺は改めて携帯を耳に当てた。

「ごめん。ちょっと色々あって……今帰ってるから母さんにそう言

つといて。じゃ」

一息に吐き出してから、間髪入れずに電話を切る。それから俺は改めて携帯の画面を見つめた。三月十六日、午後八時過ぎ。ついでに不在着信が十件ほど入っていて全部姉。

俺が屋上で光に吸い込まれたのはだいたい五時頃だったと思うから、二、三時間くらい誤差はあるけど、でもその程度だ。時間の流れ方が違うのか、もしくはそもそも全く関係性がないのか。考えたところで答えなんて出ないけど。

それにしても、「色々あって」の内容が異世界云々だなんて、姉も母も考えてもいないだろうな。考えていたら天才——というよりある意味病気だ。ため息をつきながら携帯をジャージのポケットに突っ込むと、そこで初めてエドワードが怪訝そうにこちらを凝視しているのに気がついた。

ああ、まあ、そりやそうか。彼女は携帯なんか知らないわけだし。「あ、ええとこれは携帯電話つつて……、って、言葉、わかんないんだよな」

取り出しかけた携帯を、もう一度俺は突っ込んだ。
もどかしい。

知らない世界で、知らないものばかりで不安だろうに、言葉までわからないなんて。不安を少しでも軽くしたいのに、その方法すらわからないなんて。

そんな、全く違う、何もわからない世界に、彼女を連れてきてしまったなんて。

「……ごめん……」

結局零れたのはそんな言葉だった。

謝ったところでどうしようもない。もう取り返しがつかないし、それ以前に、これが謝罪だってことも彼女には分からないんだ。

「それは、謝罪の言葉か？」

なのに、エドワードがそんなことを口にして、俺は驚いて顔を上げた。薄暗くてよくわからないけど、苦笑する彼女に不安そうな色

はなく、いつもと同じように見える。

「当たり前だろう。まったく、君は解りやすくて助かる。……せめて、私の言葉だけでも君に届いて良かった」

　　「……」

でも、全く意志の疎通ができないわけじゃないって分かって少しはほっとした。エドワードはやっぱ凄腕。知らない世界に来て俺と違ってうるたえたりしてないし、困ってばかりの俺よりよっぽど堂々としてる。さすが英雄と言われていただけのことはある。

それに比べて、俺のなんと頼りないことか。今はもう、異世界だからという言い訳も通じない。

一瞬自己嫌悪しかけたけれど、繋いだ手がぎゅっと握られて我に帰った。

「詫びないでくれ、咲良。私はヴァルグランドを出たことがないから、ただでさえ世間知らずで驚くことばかりだが、でもそれが楽しい。全く不安でないといえば嘘だろうが、私は大丈夫だ。君を信じているから」

優しく微笑むエドワードの言葉が、胸に直接響いてくる。

ああ、俺、アホだ。いくらエドワードが強くて、いくら俺が頼りなくても、それでも来たばかりのこの世界じゃ彼女は俺しか頼れないのに。

ぎゅっとエドワードの手を握り返す。弱気になってちゃ、守るなんてできやしない。彼女を守るって誓ったばかりなのに、早速破るところだった。

「……行く」

言葉はわからないかもしれないけど、何も言わないよりずっとマシな筈だ。できるだけ笑顔で、できるだけ不安にならないように優しく、その声をかけるとエドワードは微笑んで返事してくれた。

3・波乱の帰宅

かくして、俺は久々に自分の家に帰ってきた。

家族からしてみれば帰りがいつもより遅い程度だろうが、俺的には数カ月ぶりだ。向こうに行ってる間、ホームシックになったことはなかったが、いざ帰ってみるとなんだかすごく落ちついて、目の奥がジンとした。

とか、感傷に浸っている場合じゃなくて。

ちらりとエドワードを振り返る。

俺にはまだ、彼女を養い守って行くだけの力はない。だから、今は親に頭を下げるしかない。せめて俺が大人になるまで、ここにエドワードを置いて欲しいって頼まないで。

「もしかして、咲良の家？」

「そうだよ」

頷いてから、俺は彼女の手を引いた。だがソッコーでその歩みは阻まれた。俺の前に飛び出してきた、茶色のふさふさに。

そいつはワンワンと嬉しげに声をあげて、俺の足元で尻尾を振る。

「ああ……シハウ。俺今忙しいから」

飼い犬のシハウである。メスの柴犬で六歳。由来は合気技から。変な名前と周囲に散々言われるが、コキユウナゲとかイツキヨウとかよりは呼びやすくカッコイイと思う。

久々にシハウと戯れたい衝動はあるが、それはひとまず後だ。そう思ってシハウの隣を歩き過ぎるが、その瞬間に握っていた手がずるりと離れた。

振り返ると、エドワードが……シハウと思い切り戯れていた。

「咲良！ こいつ凄く可愛いー！」

かがんだエドワードに、シハウが飛びついて顔をペロペロ舐めている。エドワードはそれをまったく嫌がらず、シハウにされるがままになりながら夢中で頭を撫でくりまわして大変上機嫌である。そ

れで俺は思いだした。

エドワードは、可愛いもの好きなんだよな。

後にしてくれという言葉を飲み込んで、エドワードを急かすのをやめる。笑い声を上げながら楽しそうにシホウと遊んでいるエドワードを見て、俺はシホウに心底感謝した。良かった。エドワードが辛そうじゃなくて。悲しそうじゃなくて。できれば、この笑顔を、俺があげられるといいんだけど。

いや、できる筈だ。エドワードの中では、俺もシホウもきつと大差ない筈だ！

俺が積極的なのか消極的なのかわからない妙な確信を得た瞬間、玄関の扉ががりと開いて俺の肩がびくりと跳ねる。

「何してんの！ 帰ってきたならシホウと遊んでないでとっと入り——」

活動的なショートカット、Ｔシャツにショールパンに健康サンダルをつっかけて、玄関を開けるなり俺を怒鳴りつけてくるのは言うまでもなく——異世界に行ってもまったくこれっぽっちも恋しくならなかった俺の姉、姫野楓^{かえで}だ。

だが姉はシホウと戯れるエドワードを見た瞬間言葉を切った。そして、エドワードが振り向く前に一度扉が閉まる。十秒たたずにまた扉が開いて、だがそこに現れた姉ちゃんはずきと微妙に違っていた。髪をピンで留め、グロスを塗り直し、二丁ハイにパンプスを合わせている。

「やだ、咲良。友達といえるならなんでさっき言ってくれなかったの
お」

声のトーンが確実に一オクターブは上がり、俺は全身に鳥肌が立った。相変わらず外面だけはいい。というかこっちが素の姉ちゃん、俺にだけピンポイントで優しくないと言った方が正しいかもしれない。

それはともかく、極上スマイルでエドワードを見る姉ちゃんは、何かとっても誤解している気がした。そんなところに、とっても誤

解した母さんの声が割って入る。

「あら……咲良ってばこんなイケメンな友達がいたのね」
やっぱり誤解している。

エドワードはイケメンではない。だけどそれ以上に、エドワードについては色々話さなければならぬことがある。

「咲良、友達と遊ぶのもいいけど、遅くなるなら連絡くらい……」
母さんの小言が耳をすり抜けていく。

なんて言えればいいんだろう。その最初の一言を、俺はずっと探っていた。

でも結局浮かばなかった。親が納得するようないい理由も。エドワードが何者なのかを上手く誤魔化すような都合のいい言葉も。ただでさえ嘘が苦手で口べたな俺に、そんなこと最初から無理だったんだ。

それに思い当たったとき、俺は無意識に膝をついて、地面を頭につけていた。もう母さんや姉ちゃんの顔は見えないけれど、ぎよっとしているであろうことは想像に難くない。

「母さん、お願いします！ 何も言わずエドワードをこの家に置いて下さい！」

■ □ ■ □ ■

さすがにその一言では片付かなかった。

とにかく入れと言われて、俺は立ち上がるとエドワードを連れて数ヶ月ぶりに我が家の敷居をまたいだ。

ダイニングには三人分の夕食の準備が整っていたけれど、そちらではなく母さんはリビングに座り、テレビのスイッチを消す。

「で？」

一言で説明を求められて、俺は母さんの正面に正座すると、放課後から今までの出来事をかいつまんで説明した。

ただでさえ説明が下手だから、全くの意味不明になったと思う。
屋上にいたらいきなり違う世界になって、そこでエドワードに助けられて、それで俺は今度は逆に彼女を助けたくて。

そして彼女を連れて帰ってきたのだ——と。

案の定、姉ちゃん「何言ってるのコイツ」という目で俺を見下ろしてきたが、母さんは特に表情を動かさなかった。話し終わった俺をしばらくじっと見つめ、それからエドワードに視線を移す。

「……咲良の言ってることは、本当？」

けれど、エドワードにはこっちの言葉がわからない。俺が何を説明してたのかだってわからない筈だ。困ったようにエドワードは視線を落とし、それから彼女が声を発した相手は俺だった。

「この方達は、咲良の母上と姉上……で、合っているか？」

「うん、そうだよ」

まあ母上だとか姉上だとかいう大層な人たちじゃないけど。エドワードの問いかけに頷くと、立ったままだった彼女は跪いて、それから俺を見て正座し直して、頭を下げた。

「私には貴方達の言葉が解らないのです。こちらの礼義も知らず、どうか非礼をお赦し下さい」

エドワードの言葉を聞いて、俺を変人でも見るような目で見下ろしていた姉ちゃんが、驚いたようにエドワードを見て自分も座った。

「えっ、何語??」

やっぱりそうか。エドワードがこちらの言葉を理解できないってことは、エドワードが話している言葉もこちらの人には通じないんだ。

「えっと……、エドワードはこっちの言葉が解らないんだ。礼儀も知らなくて、ごめんなさいって」

簡単に通訳すると、母さんは疲れたようなため息を吐いた。

「……困ったわ」

「え？」

「適当なこと言うなって言いたいのに、あなたが嘘をつけないって

こと誰よりも知ってるから、困ってるの」

そう言って、もう一度深いため息をつく母さんが、なんだか急に歳を取って見えてしまった。

うちは全員童顔傾向にあって、母さんも実際の歳よりすごく若く見える。姉ちゃんと姉妹に見られることもよくあるくらいだ。おまけに、ウエーブのかかった茶髪をまとめるシュシュも花柄のエプロンも、およそ三十代の主婦がつけるのはどうよという代物で落ちつきのない母だから、こんな風に思い詰めたような、疲れたような母さんを見るのは初めてだった。

「とにかくご飯にしましょう。今取り分けるから、あなたも食べなさいな」

エドワードに向けてそう声をかけ、母さんは立ち上がると、戸棚から客用の茶碗を出した。

4・当然の誤解

母さんは口に合うものだけでいいって言ったけど、それが全く通じなかったのか、それとも気を遣ったのか、エドワードは出されたものは全部食べた。俺が向こうで食べてたものを考えると、そんな極端に味覚や食文化に違いはないと思うけど、さすがに和食は未知の領域だろう。未知のものを口にするのって結構勇気がいると思うのだが。

それなのに、ためらうような素振りも見せずエドワードは綺麗に全て食べ終わると、俺達を真似して手を合わせた。しかし、何をしても惚れればれるほど絵になる。と思っていいたら、母さんも姉ちゃんも感じ入ったようにエドワードを見ていた。

やっぱり高貴な人っていうのは、言わなくても端々にそれが表れているなと思う瞬間である。

そんな風にまじまじと見る俺達に気付いて、エドワードは少し驚いたような顔をした。それで、母さんと姉ちゃんも慌てて視線を外す。なんだかぎくしゃくしているというか、気まずい空気を感じていると、不意にエドワードが俺に声を掛けてきた。

「……咲良、もし良ければ、伝えて欲しいことがあるんだが」

おずおずとそう切り出してくるエドワードに頷くと、幾分かほっとしたようにエドワードが先を続ける。

「美味しかった。それに、楽しかった」

きっと無理してるんじゃないと、伝えたいんだと思うけど。何か、俺にはその言葉自体が無理をしているように感じた。だって、俺達は何を話しているのかわからないのに、どうやってそれを楽しめるんだろう。そもそも、みんな何を言っているかわからず、全体的に静かな食事だったし。

俺が腑に落ちない顔をしていたからだろうか、エドワードは少し迷った素振りを見せたが、さらに言葉を付け足した。

「家族でこんなに温かい食事をしたことなど、数える程しかないから。だから嬉しい」

エドワードは本当に嬉しそうだったけど、それを聞いたら俺は少し悲しくなった。だって、俺はエドワードから本当の家族との団らんを、永久に奪ってしまったわけだから。いつかは、家族とテーブルを囲む未来もあつたかもしれないのに。

「咲良。何て言ってるの？」

俺とエドワードが話しているのを見て、姉ちゃんが声をかけてくる。聞かれたので、俺は聞いたままを伝えた。

「美味しかったって。それから、あんまり家族と食事したことないから、嬉しいって」

俺の言葉を聞いて、母さんと姉ちゃんが眉を潜める。

「そうなの？ どうして？」

「えっと……エドワードの母さんと兄さんは亡くなつたって聞いたそれに、向こうは戦争ばかりだからそんな暇なかつたんだと思うよ」

俺の答に、母さんも姉ちゃんも絶句する。急に場が暗くなった。

「そんな戦争ばかりのところ、よくアンタ生きてられたね」

重くなつた空気を払うために、わざとだろう。姉ちゃんが軽い調子で茶々を入れる。でも、そんな言い方をするってことは少しは俺の言ってること、信用してくれてるんだろうか。

「それはエドワードが助けてくれたからだよ。そうじゃなかったら多分死んでた」

そう答えると、また母さんが長いため息を吐いた。

「冗談でもそういうこというのやめてくれる？ ……うつん、あなた冗談も下手だもんね。だとしたら、エドワードさんにはお礼を言わないといけないのね」

箸を置いて、母さんが夕食の後片付けを始める。エドワードが手伝おうとして手を伸ばしたが、母さんはそれを止めると俺を見た。

「とにかく着替えていらっしやい。お風呂の使い方、わからないな

ら教えてあげて、とりあえずあなたの服を貸してあげなさい」

「いやいやいやいや。そこで俺は大事なことを言い忘れてるのに気がついた。」

「いや、あの……、みんな勘違いしてるみたいだけど、その……、エドワード、男じゃないから。女の子だから」

「はた、と母さんと姉ちゃんが、片付けものの手を止める。そして、たつぷり十秒くらい過ぎてから。」

「……なああんでそういう大事なことを先に言わない、バカサクツ……！」

姉ちゃんの怒声とビンタが同時に飛んで、俺は食卓の椅子から吹っ飛んだ。

「咲……」

「なんだ、女の子だったのねー。じゃあ、私の着替え貸してあげるね。あ、私楓っていうの。よろしくね！ あつても下着も要るよねー。とりあえずコンビニで買ってくるけどサイズいくつ？」

エドワードの心配そうな声は、姉ちゃんのマシンガントークに掻き消された。ちなみにそれは俺が聞いてはいけない内容な気がしたが、どっち道言葉のわからないエドワードには答えようがない。姉ちゃんもそれに気がついたのか、ぐるりと首を俺に向けた。

「いくつだろう？」

「お、俺が知るわけないだろ馬鹿！」

「知ってたらブチ殺そうと思っただけよ馬鹿」

「ついうっかり取り繕うのを忘れた俺は、もう一発ビンタを食らう羽目になり、「姉ちゃんよりはでかい」という言葉を必死に飲み込んだのだった。」

5・想定外の試練

「うあああゝ、生き返るー！ー！」

久方ぶりの風呂に、俺は虚しくもつついっつい盛大な独り言を上げてしまった。

向こうでは基本的に水で体を拭くしかなかったのである。まあ俺は体が綺麗にさえなればそれでいいけど、やっぱり風呂に浸かるのはキモチイイ。

けど、離れているとエドワードのことが心配になって落ちつかない。姉ちゃんは世話好きだから、任せておいて大丈夫だとは思うけど……、こうしてエドワードが傍にいない状態で日常を過ごしていると、夢だったんじゃないかと思って怖くなる。

だからといって、片時も離れないってわけにもいかない。向こうでは一緒に部屋で暮らしていたけど、現代日本では未成年の男女が同じ部屋で寝起きするなんてこと、一般的に不道德だ。教育に悪い。そもそも、できる自信もない。

今でさえ、この風呂がエドワードが入った後だと思うと……ごほん。

一人咳払いをして、俺は脱線しかけた思考を強制的に元に戻した。できるだけ傍にいると言っても、当分は春休みだからいいとして、学校が始まったらそれはさらに難しくなる。まだ喋ることもままならないエドワードが学校に通うのは難しい。そもそも、戸籍ないのに通えるかどうかわからない。そうだ、健康保険にも入ってないのに、病気になったらどうするんだろう。あつちとこっちじゃ環境が全然違うし、いつ健康に問題が出るとも限らない。

でも戸籍なんて、下さいと言って貰えるものじゃないだろう。役所にありのままを説明しても、頭おかしいと思われるだけだろうし。この管理された現代日本で、戸籍もなく、エドワードは生きていけるんだろうか。

いや、そこをどうにかして守り抜くのが俺の役目だろう。でも、そう思い直してはみても。俺は、この先自分の人生の何を犠牲にしても、一生彼女を守って行きたいと思っっているけど……でも、エドワードが俺の傍を離れたいと思ったら……

そこまで考えて、俺は勢い良く風呂から立ち上がった。

考えるとすぐ駄目な方向に行ってしまう。とにかく、俺が一人であれこれ考えていても始まらない。

今はできるだけ、傍にしよう。

知らない世界での心細さは、俺がいちばんよく解るつもりだ。それでも俺が挫けなかったのは、エドワードがずっと傍にいてくれたからだ。今は同じことを彼女に返すくらいしかできないし、思いつかない。

そんな俺を待ち受けていた最初の試練は――

長い髪を三つ編みにして、ピンクでフリルなパジャマを着て恥ずかしそうに俯くエドワードだった。



とりあえずそれは、俺が想定していたどんな試練よりも強大だった。

別に、なんだ、軍服を来て威風堂々としているからエドワードは男らしいのであって、本当は可愛いことなんて自慢じゃないがとくに知ってる。だからって、これはなんか色々駄目だろう。反則だろう。教育に悪いだろう。

だが家族の手前、俺は必死に平静を取り繕った。繕えてないのはむしろエドワードの方で、これまで全く何にも動じなかった彼女が、ここにきて初めてものすごい戸惑いを見せている。

「あたしのパジャマなんだけどさー、似合うよね？ こういうの着れば可愛いのにー。ってわけであたしもお風呂入ってくるからー」。

上がったらエドちゃんのお布団あたしの部屋に敷くねー」

また一方的にまくしたてながら、姉ちゃんがリビングを出て行く。今二人にされるのは物凄い困る。母さんもさつきから姿が見えないし、俺はパジャマ姿のエドワードと二人取り残されて、激しくうろたえた。けど、エドワードがあまりにも恥ずかしそうなのを見て少し心配になった。

「エドワード、もし嫌なら言え……ないかもしれないけど。えっと……明日、服、買いに行こうか」

小遣いをはたけばエドワードに服くらい買ってあげられる……と思う。女の子の服がいくらするかなんて知らないけど。今は言葉が通じなくてわからないかもしれないけど、明日店に連れていってあげれば解るだろう。

って、もしかしてそれって世間ではデートというのでは……。また思考が脱線しそうになったが、エドワードが声を上げたことによつて幸いにも中断された。

「あの……、渡されたので着てみたけれど……、さすがにこれは、私には合わないのではないかと……思う」

そう言つて、エドワードは耐えかねたようにうずくまってしまう。もし嫌だと思つているならこんなこと言つのは悪いのかもしれないけれど……合わないことはないと思う。そんな仕草も含めて、可愛い。むしろ可愛すぎて困る。

確かにピンクというイメージではないけれど、似合うと思う。俺もその場に座ると、エドワードの前で首を横に振つた。

「そんなことないよ。凄く可愛い」

ほんとだったら恥ずかしくて言えなかったかもしれないが、通じてないのいいことに俺は素直に本音を言つた。

俺が声を上げたので、エドワードが顔を上げる。風呂上がりだから、それとも照れているのか、ほんのり赤くなった頬がまた絶妙に可愛い。そもそも意中の女の子なんて何してたって可愛いのに、これはもうなんか、そう、とにかく反則だ。

色んな意味で、彼女と一緒に暮らしていく自信がなくなった。

「……変、か？」

そんな風に聞き直されて、俺はもう一度首を横に振った。

「じゃあ、その……、に、似合う、か？」

赤くなっているのを自覚しながら、何度も頷くと、エドワードはほっとしたように表情を緩めた。

「そ、そうか」

だ、駄目だ。自宅のリビングだから辛うじて理性を保っているが、こつというのは健全な思春期少年にまったくもってよろしくない。初日から限界を感じかけたが、スリッパの音が聞こえてきて、がつかり半分にほっとする。多分、母さんだ。

「あら、エドちゃん、可愛いじゃない。そうしているとちゃんと女の子ね」

たくさん箱や本を抱えた母さんが、体でドアを押して入ってくる。それにしても、妙な呼び方が定着したな。これ、エドワード、自分が呼ばれてるってわかってるんだろうか？

いやそもそも、エドワードって紹介してしまっただけで良かったのだから。亡くなったお兄さんの身代わりで戦っていたからそう名乗っていただけで、エドワードにはエレオノーラという本名がある。こちらでエドワードと名乗る必要なんてないのだから、本名で紹介すれば良かったと今更になって思った。でも、勝手に呼んでいいものか分からないから、今も言えないままだけど。

「で、母さん。それなに？」

結局言えないまま、俺は母さんが持ってきたものの方に興味が逸れて、聞いてみた。

改めてよく見てみると、小さい頃見た記憶がある玩具もある。

「知育玩具よ。とにかく言葉が話せないと始まらないでしょ？ エ

ドちゃんが言葉を覚えるのに役に立つかと思って」

エドワードの前にそれを差し出すと、彼女も興味深そうにしげしげと眺めた。ひとつ箱を開けてみて、平仮名の羅列があるボードを

出してみる。スイッチを入れて「あ」の文字を出すと、あ、とスピーカーから発声される。それを見て、エドワードもぴんときたようだった。

「これ……、もしかして、私の為に？」

頷いてみせると、エドワードは嬉々として母さんを見上げ、だけでもどかしそうに小さく首を振って俺を見る。

「礼を伝えて……、いや、礼を言いたいときにはなんとはいいい？」

そう尋ねるエドワードは本当に嬉しそうで。

俺の答えを聞いて、母さんにありがとうと述べるエドワードのその言葉は、今までの彼女の言葉とは少し違った響きで、俺にもちゃんと届いた。

6・ココアと不安

その夜、俺はなかなか寝付けなかった。

自分の部屋も、自分の布団も、とても寝心地はよくて睡魔は襲ってくるけれど、でもそのまま眠ってしまったらヴァルグランドで過ごした記憶も、エドワードも、全部夢物語になってしまいそうで怖かった。

眠ってしまいそうになつては飛び起きて、そんなことを十回も繰り返すと俺は眠ることを諦めた。どうせ明日から春休みだし、眠れなかったところで差し支えない。

でも、起きて電気をつけたところで、することなんてない。エドワードが気になるけれど、だからって姉ちゃんの部屋に侵入する勇気は俺にはない。侵入して、何がしたいというわけでもないし。ただ、エドワードがちゃんとそこにいるってわかれば安心できるかもしれないけど、でも結局離れてしまえばまた不安になるし。

何かものすごく、彼女に依存しているような気がした。向こうの世界で離れたときも、ずっとエドワードのことばかり考えていたし。子供じゃあるまいし、いい加減にしろと自分に言いたい。

でも、言い訳するわけじゃないけど、それはエドワードが別世界の人間だからだ。同じ世界で、例えばクラスメートとかなら、ここまで不安にはきつとまらない。向こうの世界で過ごした日々も、彼女自身の存在も、酷く現実感を伴わないから怖い。俺は重いための息をつくとも部屋を出て、音を立てないようにキッチンまでいくと、コップに水を注いで一気飲みした。ますます目が覚めたただだった。こんな調子で、俺、明日から大丈夫か。

「咲良」

ぼんやりしていると、突然呼ばれて俺はびっくりと肩を跳ねさせた。でも、驚くのは逆に、とても心は落ちついていて。多分、今いちばん聞きたかった声を聞けたから、だと思う。

「あ……ごめん。起こした？」

「違う。私も眠れなかっただけだ。それと、音や気配には敏感なんだ。軍人だからな」

言いながら、エドワードがダイニングの椅子を引く。そして腰をおろしてから、言い直す。

「……いや、元軍人、か」

複雑な顔をするエドワードに、何と言っているかわからない。でもそれ以前に、今すなりと会話が通じたことを怪訝に思っつまじまじと彼女を見ると、それに気付いたのだろう、エドワードはふつと笑った。

「言っただろう。言葉が通じなくても、君が何を言いたいかはわかる」

「——敵わない、な」

小さく呟いて、俺は使っていたグラスをゆすぐと、しまう前にそれを使って、飲み物を飲むジェスチャーを試みせた。

「何か飲む？」

通じなかったわけではないだろうが、エドワードが悩むように俯く。俺も少し迷ったけれど、返事を待たずに冷蔵庫を開けた。何かしてないと間がもたなかったし、飲まないならそれでもいい。

俺が普段牛乳しか飲まないせいで、冷蔵庫には牛乳しかなかったけど、確かココアがあった筈だ。

鍋を使うと洗いのものが面倒なので、レンジを使ってココアを作り、エドワードの前に置く。彼女はしばらく俺とココアを見比べていたが、やがてマグカップに口をつけると、目を輝かせてこちらを見た。「旨い」

そういえば、エドワードは甘い物が好きだったな。彼女が喜ぶのを見てほっとしながら、俺も隣の椅子を引いた。けどそこからどうすればいいのかわからなくなって、結局間が持たなくなる。何を話しても言葉が通じないのだからもどかしい。

しばらく、エドワードがココアを啜る音だけを聞いていたけど、

それを飲みほしてしまうと静寂が訪れた。

「……不思議だな」

ややあつて、エドワードがそんなことを呟く。

え、と聞き返すと、彼女はこちらを向いて、また少し複雑そうな表情をして、それから微笑んだ。

「今が不思議だ。眠ってしまったら、全部が夢になってしまいそうで……怖い」

「俺も、同じこと考えてたよ」

胸のうちを代弁するかのようなエドワードの言葉に、思わずそう呟いていた。

そして少しほつとしていた。エドワードがそれを、怖いと言ってくれたことに。夢であつて欲しいと思っていないことに。

急にふわりと肩にぬくもりを感じてそちらを見ると、エドワードがもたれるようにして俺の肩に頭を乗せていた。触れあっていることにどきりとして、鼓動が早くなる。

「……早く、君とちゃんと話ができるようになりたい」

エドワードが喋るたび、鼓動がさらに加速する。抱き締めてしまいたかったけど、もし家族が起きてきたらどうしようとためらっているうちに、温もりは肩から離れていった。

「そろそろ、戻る。楓さんが心配するかもしれないし」

カップを持って立ち上がり、エドワードがそれを流しに置く。引き止めたかったけど、引き止めて何ができると言えば何もできない。でもただ、一緒に居たかった。

「ありがとう、咲良。……また、明日」

けどどのみちそんな我儘を伝える方法もなくて、うん、と頷くしかできない。でも、また明日という言葉が少しだけ、胸の不安を拭ってくれた。

片時も離れないのは無理だけど、でも明日になったらまた会えるんだ。これで二度と会えないわけじゃない。世界に隔たれてしまったわけじゃないんだから。

そう自分に言い聞かせて、俺はエドワードを見送ると、自分も部屋に戻った。

肩の温もりを思い出すと、それからはずっと眠りにつくことができた。

7・幸せの定義

起きたら、既に昼を過ぎていた。

布団を跳ねのけて、ジャージのまま部屋を飛び出す。リビングに飛び込むと、キッチンにいた母さんが呆れた顔でこちらを見た。

「いつまで寝てるの——」

「エドワードは!？」

さすがにこんな時間まで寝てることはないだろう。だけど姿が見えないことに焦って、俺は母さんの声を遮って叫んでいた。何のことって言われたらどうしようって、答えを待つ時間が気が気でない。そんなもの、実際は数秒でしかないのに。

「とつくに起きてるわよ。服を買いに楓と出かけたわ。楓の服じゃサイズが合わなかったみたい」

そりやそうだろうな。姫野家は全体的にみんなちっちゃい。その中でも姉ちゃんが一番ちっちゃい。でもエドワードは——認めたくないが——俺よりも身長高いから、パジャマみたいなゆったりした服ならともかく、私服は姉ちゃんのじゃ無理だろう。

とにかく母さんがそう言うのを聞いて、やっと俺はまともに呼吸ができた。そんな俺を見て母さんが苦笑する。それに気付けば、今度は物凄く恥ずかしくなった。これじゃ、余裕がないのが周囲にバレバレだ。

でも落ちついたら落ちついたで、俺と一緒にいるかと思ってたのにとちよつと残念な気持ちになる。まあ俺は女の子の服のことなんてわからないから姉ちゃんの方が適任だとは思っけど。

そんなことを考えられるくらいには余裕も出てきたので、俺は着替える為に部屋へ引き返そうと扉に手をかけた。けれどその前に、母さんに呼びとめられる。

「待ちなさい、咲良。二人が帰ってくる前に、話があるの」

有無を言わさぬ声に、俺は扉に掛けた手を引いた。母さんがダイニングの椅子を引いて座ったので、俺もその向かいに腰を下ろす。

「……何？」

「人が一人生きていくつてどれだけ大変か、あなた知ってる？」

突然の切り出しに、俺は息を飲んだ。

それは、鋭いけれど酷く遠まわしな言葉だった。それでも、母さんが何が言いたいかはなんとなくわかる。

「……知ってるよ」

「そーお？ まだ働いたこともないのに？ じゃあ自分の学費いくら知ってる？ 食費は？ この家の維持費は？ どんな保険に入ってるのとか、どんな福祉を受けてるのとか、それにはどんな手続きがいるのかとか、受けられなかったらどうなるのかとか、全部知ってるのね？」

「う……」

何か言い返したかったけれど、何も言えなかった。俺は寝て起きてご飯食べて学校行って遊ぶという毎日しか送っていないのだ。母さんの言葉に、それを嫌というほど思い知らされる。

エドワードが人並みに生きて行くには、いったいどれほどのお金がかかるんだろう。それを考え出したのを見透かしたように、母さんはさらに言葉を続けた。

「お金の問題だけじゃないのよ。エドちゃんには戸籍がないから、あらゆる福祉が受けられない。学校にも行けないし、働くことだって難しい。けどそんなことは、それこそお金さえあればどうにかなるわ。でも、自立することはとても困難よ。あなたは彼女を一生面倒見る覚悟があつて連れてきたの？」

それくらいのは、俺も少しは考えた。

それだけじゃない。知らない世界で俺と生きていくより、元の世界に残った方が彼女にとっては幸せだろうって、それだってちゃんと考えた。

でも駄目だった。

頷く俺に、母さんはため息をついた。きつと、俺が何も考えてないって思ってた呆れているんだろう。

確かにそうだ。今挙げられたこと意外にも、彼女がこの世界で生きて行くのには沢山の障害があるんだろうと思う。

「ごめん、母さん。俺は世の中のことなんて何も知らない。生きていくのがどんな大変かなんて知りもしないのに誰かの一生に責任持つなんて、到底無理だってわかってる。わかってるけど、それがどれだけ無理なことでも、俺はやってみせるよ」

わからないくせにデカイことを言う俺を、母さんは笑いこぼしたかったけど、難しい顔をして見つめた。

難しい顔といえば、あっちの世界での友人を思い出す。きつと、誰よりもエドワードの幸せを願っていたあいつの為に、俺は絶対に後には引けない。

「自分で馬鹿なこと言ってるってわかってるよ。でも、エドワードはずっと命懸けで戦ってたんだ。怪我ばかりで、だけど国の為とか家族の為とかで、自分のこといつも後回しで……、俺は母さんとか周りの大人のお蔭で今までぬくぬく生きてたからさ、そういうの見てられなかったんだよ。耐えられなかった。幸せになって欲しいんだ」

うまく言えないけど、何も考えないで連れてきたわけじゃない。それだけは分かってほしくて、俺は懸命に言葉を繋いだ。じつと俺を見る母さんの目は厳しかったけど、俺が言葉を切ると、ふっと母さんはそれを緩めた。

「あなたがそんな風に真っ直ぐで、優しい子に育ってくれたことはとても嬉しいわ。でもね……、幸せの定義は人によって違うの。あなたは、自分の考える幸せを彼女にも押しつけようとしていない？」

母さんの言葉が、鋭い刃のように胸に刺さった。

違うつて、言いたいのに言葉にならない。

ヴァルグランドを出たあの日から、ずっと俺は、戦いさえなければエドワードは幸せになれると思ってた。

——戦いさえなければ。でもそれは、果たして正しかったのだろうか。胸につかえていたその思いが、母さんの言葉で一気に膨れ上がって俺にのしかかる。

凍りついたような時間は、玄関の扉が開く音によって動き出した。母さんが、小さく息を吐いて立ち上がる。

「ただいま！　ねえ見て見て、すっごく可愛いんだよー、羨ましいなあ身長高いのって！　しかもほっそいほっそい！」

かましい姉ちゃんの声が家中に響き、玄関まで出迎えに行った母さんが、「ほんとに可愛いわー」と今までとは別人のようなのんびりした声を上げる。でも俺はその場から動けなかった。

8・心重ねて

外出から戻ったエドワードは、多分姉ちゃんを選んだのであろう、新しい服を着ていた。ニットのワンピース（けっこうミニ）にタイツ、色は全部黒だったから、少しは自分の意見も伝えられたんだと思う。

「細いんだから足出せばいいのに、ニーハイですらNGされちゃった」

と、姉ちゃんは残念そうに肩を竦めていた。確かにそれは俺も残念……ごほん。

男装してたせいもあると思うけれど、エドワードは肌を見せるのを極端に嫌う。多分傷を気にしてるんじゃないかと思う。そのことで婚約者に酷いこと言われていたし。

エドワードは嫌がるだろうけど、あれを見れば、母さん達だって俺がこちらに連れてきた気持ちもわかるんじゃないか。

そう思う一方で、でも俺が彼女を連れてきた本当の理由は、彼女の幸せを考えたからでも、戦いから解放したかったわけでもないだろうって、自分を苛む声が消えない。

「……元気がないな？」

声をかけられて、顔を上げる。ふと気がつくと、エドワードが心配そうにこちらを覗きこんでいて、慌てて俺は作り笑いを浮かべた。「そんなことないよ」

色々悩むことはあるけど、それで彼女に心配かけてちゃ本末転倒だ。

俺は顔に出やすいから、特に気をつけなくちゃいけない。オーバーなくらい首を横に振りながら、俺は古紙の束を持ちあげた。片付けものをしている途中だったのである。

ほぼ物置と化していた空き部屋をエドワードの部屋として使える

よう、朝母さんが片付けてくれたらしい。それで、母さんがまとめた古紙や粗大ゴミを俺が運んでいる。父さんが単身赴任中つてのもあり、力仕事は全部俺つてというのがこの家では当然のルールだ。

「運べばいいのか？ 手伝おうか？」

「いいよ。けつこう重いし」

もう一度俺は首を横に振ったが、エドワードはひよいと積んであった段ボールを持ちあげた。

「力と体力には自信があるが」

「いいいの！ わかってるよ！ でもエドワードはやらなくていいの！」

両手に持っていた紙束をおいて、エドワードから段ボールをひつたくる。何が詰まっているのか、結構な重さでふらつきそうになった。だが俺の中の意地という意地を掻き集めて踏みとどまる。

そりゃあこんなもの運ぶくらい、エドワードにとつてなんでもないことだろう。俺より力や体力もあるだろうさ。それでも、母さんや姉ちゃんに見られたら何を言われるかわかったもんじゃない。

その母さんは昼食の片付け中で、姉ちゃんは鼻歌を歌いながらパソコンを弄っていた。エドワードの部屋に置く家具を探しているんだそう。

俺はどっかの超絶スコン君と違って、ぶつちゃけ姉ちゃんが苦手だ。でも、今人生で初めて、姉ちゃんがいてくれて良かった思っている。女の子の服や家具を見繕ったりつていうのは、俺には絶対に無理なことだったから。

だからこそ、こういう力仕事は俺がやらないと。ただでさえ俺は体力しか取り柄がないんだから。

というわけで、俺は段ボールの上に紙束を乗せて歩き出した。粗大ごみの日までまだ日があるから、とりあえず車庫に置いておけばいいだろう。家の外に出て、邪魔にならないよう車庫の端っこに積み上げていると、後ろから足音が聞こえた。

エドワードがついてきたのかと思ったけど、振り返った俺が目

したのは、母さんの姿だった。

「さっきの話だけど……」

振り向くと同時に母さんが声をかけてきて、俺は重い気持ちで額の汗を拭った。色々考えると辛い。けどだからって背を向けてはいられないから、まっすぐに母さんを見る。

「うん」

「今更言っても仕方ないことだったと思って。でもね、知っておかないとこの先あなたもエドちゃんも辛いと思うから」

「分かってるよ。言ってもらえて良かったと思う。母さんにも姉ちゃんにも感謝してるよ」

素直にそう言つと、母さんはほっとしたように笑った。

「今はとにかく、エドちゃんが言葉を覚えて、こっちの世界のことを理解してもらうのが先ね。それから彼女とも話しあつて、一個ずつ考えていきましょう」

心強い言葉が胸に染みて、思わず涙ぐみそうになつてしまった。

正直、ここまでの理解と協力が得られるとは思わなかった。

異世界から一人連れてきて、養つてほしいって我儘を言う子供なんて、日本中、いや地球のどこを探したって俺しかないだろう。「ありがとう。迷惑かけてごめん……母さん」

「自分の子供の後始末をするのも親の仕事のうちよ。それよりエドちゃんのことを考えてあげなさい。今彼女の言葉がわかるのは、あんただけなんだから」

その言葉に背中を押されて部屋に戻ると、エドワードは窓を開けて外を見ていた。長い黒髪が風になびいて、その横顔はとても寂しそうに見えた。

「エドワード」

呼ぶと、彼女はこちらを振り返った。……今まで思い詰めていてあまり意識してなかったけど。

ミニワンピースのエドワードは、まるでモデル雑誌からそのまま出てきたかのように、綺麗だった。

「あの……似合うよ。その服」

物凄く今更な言葉は、さすがのエドワードでも予想できなかったのだろう。首を傾げるエドワードの傍まで行って、服のことだとわかるように袖を掴む。

「似合う。可愛い」

可愛いというと、エドワードの表情が少しだけ動いた。さんざん姉ちゃんと母さんが可愛い可愛いと連呼していたから、なんとなく褒め言葉だということはわかるんだろう。

……そういえば、可愛いって日頃散々俺が言われてた言葉だな。

「……可愛いよ」

いつもエドワードからされてるように、今度は俺が、そう言ってみると恥ずかしさ倍増である。多分耳まで真っ赤な俺を、エドワードは少し驚いたように見つめてきたが、やがてふっと彼女も微笑んだ。

「咲良も可愛い」

俺の言いたいことは伝わったようで、彼女もそう言いながら俺の髪をくしゃりと撫でた。

9・言えない言葉

「じゃーんっ！」

そんな効果音と共に納屋の扉を姉ちゃんが開ける。そして、その中を見て俺は絶句した。

数日後の朝、姉ちゃんが注文していた家具が届いた。叩き起こされてベッドの組み立てとかは俺がやったけど、その後は外に放り出され、昼過ぎになった。呼ばれて戻ってきてみれば、なんとモラブリーな部屋が完成していたわけである。

一言で言うなら、とにかくピンクだ。カーテンもシーツも布団もラグも、ピンク一色。

「……姉ちゃん」

「ん？」

「これ、姉ちゃんの趣味だよな……？」

「だって、エドちゃんの趣味わからないもん。大丈夫、女の子はみんなピンクが好きなのよ」

いや、絶対にそんなことはないと思う。

別に俺も本人から聞いたわけではないが、エドワードは多分黒が好きなんじゃないかな……。今日もエドワードは、黒のインナーに黒のパーカー、そして黒のショートパンツと黒のタイツで黒づくめだ。前に姉ちゃんと買いものに行ったとき服は何枚か買ったみたいだけど、俺は今日まで黒以外を着ているエドワードを見たことがない。

「あのさ……、多分だけどさ、俺、エドワードは黒が好きだと思うだけどさ……」

「やっぱりピンクが可愛いよね。お姫様気分だよね」

うわ聞いちゃいねえ。だいたい、気分に入るまでもなく、エドワードは正真正銘お姫様だ。

当の本人は、啞然として真っピンクの部屋を眺めていた。やっぱりどう考えてもこれはエドワードの趣味ではないと思う。だけど大変申し訳ないことに、これでいいのかと聞いて否と言われても俺はそれを姉ちゃんに伝える勇氣はない。

「どう、エドちゃん。氣に入ってくれた？」

呆然と立ちすくんでいるエドワードの手を取って、姉ちゃんが彼女を部屋の中に引き入れる。エドワードは我に返ったように数回瞬きをした後、改めて部屋の中を見回した。

「私の、部屋？」

片言の日本語でそう問いかけたエドワードに、姉ちゃんが何度も首を縦に振る。だけどそれを見たエドワードは、何故か項垂れてしまった。

「咲良」

「ん？」

不意に呼ばれて、やっぱりこのピンクが氣に入らなかったのではないかと俺は焦る。だけど彼女が口にしたのはそんなことではなかった。

「こんなに良くしてもらって、いいのだろうか……。私は……、君や、君の家族にとって迷惑ではないか……？」

戸惑いがちな声に、胸が締め付けられる。

違う、一番迷惑な存在はこの俺だ。

無理やりエドワードを違う世界に連れてきてしまつて、家族に負担を強いて。

この家具や、彼女の服のお金は一体どこから出ているんだろうと思うと、お世辞にも金持ちとはいえないウチの家計が氣になつてしまった。

「ねえ、咲良。エドちゃんなんて？　もしかして氣に入らなかったのかな」

珍しく姉ちゃんがしおらしい様子でそんなことを聞いてくる。
マイペースすぎる日頃の行動を考えたら思いきり頷いてやりたい

ところだけど。それはエドワードの本心を伝えることにならないから、俺は首を横に振った。

「いや、ただ戸惑ってるみたい。こんなに良くしてもらっていいのかって」

「なーんだ。びっくりしたよ」

一瞬で、ころつと姉ちゃんが笑顔に戻る。そしてエドワードの両手をぎゅっと握りしめた。

「あたしずっと妹が欲しかったんだー。まさか咲良のカノジョになってくれるようなモノ好きな女の子がいるとは思わなくて全然期待してなかったんだけどさー、こんなに美人さん捕まえるなんてさすがちよつとは我が弟だよな」

今、どさくさにとても失礼なことを言われた気がする。そして、ちよつとは弟とか、エドワードより日本語が崩壊している。でも、それより何よりも。

「あ、あのさ……別に彼女っていうわけじゃないから……」

エドワードが言葉が分からなくて良かったと、今だけと思う。

俺は気持ちを伝えたつもりではあるけど、明確に好きです付き合っ
て下さいと言ったわけじゃないから、なんとなく俺とエドワード
の関係って曖昧なままな気がする。だからそう言ったのだけど、姉
ちゃんはそれを聞くなりエドワードの手を離して俺に詰め寄った。

「何ソレどういうこと？　じゃあんたは、あんたに気もない女を無理やり違う世界に連れてきたってこと？」

「そういう……わけじゃないと思うけど、多分。でもなんというか……、その、彼女とかその段階まで行ってないというか……」

「じゃあどの段階なのよ」

ストレートに聞かれて、俺は答えに詰まった。多分真っ赤になっているであろう俺を見て、姉ちゃんが「にやり」と笑う。とてつもなく嫌な予感が全身を駆け抜けた。

「ねえ、エドちゃん。エドちゃんは咲良をどう思ってる——」

「本人の前で聞くな！！」

どの道エドワードには通じないと思うけど、咄嗟に俺は大声で遮って、姉ちゃんを部屋の外に押し出した。

けど駄目だ。もう遅い。これから俺はこのネタで姉ちゃんに弄られ倒されるんだ。どうしようもなく悲しい予感と共に姉ちゃんを一生懸命部屋から追い出して戸を閉めようとする、背中からエドワードの声が飛んだ。

「楓さん、ありがとう」

流暢な日本語だった。それに驚いて姉ちゃんが手を緩めた隙に、俺は部屋の戸をぴしゃりと閉めた。

「……楓さん、なんて言ってたんだろう」

嵐が去って静かになった部屋に、そんなエドワードの声が落ちる。俺は姉ちゃんが再び侵入してこないよう戸を押さえていたが、その気配がないので手を離れた。

「エドワード、日本語ちよつとうまくなったね」

俺の答えはエドワードの独り言とは全然関係なかったけど、意味は通じたようで彼女はこちらを見て微笑んだ。

「もらった道具や本で自分なりに勉強してみた。他にも咲良達の会話を聞いたり、てれび……？ で観たりして、動作や表情などで推測して調べたりしていたらなんとなくわかってきたよ」

それは凄い。じゃあもしかして、さっきの姉ちゃんの言葉とかも大体解っていたんじゃないかとちよつと焦る。

「剣を振っているだけだと思っていただけだろう？ これでも王家の間として学習はしていた。成績も良かったんだぞ」

でも俺の焦りとは見当違いなことを得意げに言われて、少しほつとする。

いや、ほつとしてる場合じゃないんだ。俺は大事なことを曖昧にしたままなんだって気付かされた。言葉が通じないことを、俺は逃げ道にしていたんだ。

でも、考えてみれば言葉が通じないっていうのは変な話だ。向こうにいたときは、俺の言葉は皆に通じていた。それは、俺がちゃん

と向こうの言葉を喋っていたってことだろう。今だって、俺だけはエドワードが何を言っているのかわかる。ということは、今だって話せる筈なのに。

意識が日本語に向いているから駄目なのかな。元々異世界の言葉を喋っているつもりなんてなかったから、母さん達と話をしているとどうしても日本語にしかないのかもしれない。でもそれだったら、無意識になってみれば、もしかして話せるかも。

黙り込んだ俺を不思議そうに見るエドワードを見つめながら、俺は雑念を追い払うのに集中してみた。それから、向こうの世界でエドワード達と話していた自分をイメージしてみる。

通じるように。そう祈りながら口を開く。

「エドワード、俺……」

そこまできて、何を話すか決めてなかったことに思い当たる。他愛もないことで良い。それが、俺が言っていることわかるって、単刀直入に聞いてみればいい。そう思って言葉を続けたのに、出てきたのは全然違う言葉だった。

「俺さ……、ずっと、戦争さえなければあんたは救われるって思ってたんだ。だから、こっちに連れて来ればいいって、そればかり考えてた。でも違うよな。知らない世界で生きていくってそんな簡単じゃないよな……」

「咲良？ ……すまない、よくわからない。もう少しゆっくり喋ってみてくれないか」

零れ落ちる俺の懺悔は、やっぱりエドワードには理解できていないみたいだった。

落胆する気持ちの中に、ほんの少し安堵が混じることにより自己嫌悪しながら、通じていないと分かっている俺はその先を続けた。

「でも、どうしても離れたくなかったんだ。……好きなんだ……」
通じていたならきつと言えなかった、俺のどうしようもない我儘を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7563y/>

IN BLOOM ～元英雄と普通の学生～

2011年11月28日11時46分発行